新約聖書馬可傳

全

02-SI
海老澤文庫

02-SI 23-1/2 p240

耶蘇降生一千八百七十七年　翻譯委員社中

新約聖書馬可傳

明治十年

日本横濱上梓

第一章　こと神の子耶蘇キリストのふくいんのもとめあり　二預言者のしるしてゝ視よ我れ汝の面前に わがつかひを
つかはさん。こは汝んぢの まへにあんぢの道をまうくべし　三野
よゝべる人のこゑありいたゝ主のみちをそなへそのみち
をまつすぐにせよとあるがごとく　四ヨハネ野にをりてバプテスマ
をほどこし罪のゆるしをえさせんがために悔改のバプテスマ
をのべつたへたり　五ユダヤの くに中および エルサレムの人々
こぞりきたりておのゝその罪をいひあらはしヨルダムを い
ふ河にてバプテスマをうけ　六ヨハネハ駱駝のけごろもを著こ

海老澤有道文庫

一は皮帶をむすび蝗蟲と野蜜をくらへり七このべつ
へけるハ我よりまさるものゝ後はきたらんときハ屈
てその履のひもをとくまもたるにへるハ水をもてあん
ちゝはバプテスマをほどこせしかどこの聖靈をもてあんお
らはバプテスマをほどこすべし九そのころ耶蘇がリラヤの
ナザレよりきたりヨルダンにてヨハネよりバプテスマをうけ
十やがて水よりあがるとき天われてせいれい鴿のご
とくくだりてそのうへにくるをみたり十一また天よりこゑありて
わがあんちやわが愛子わがよろこぶところのものなりと
○十二こゝにて靈たゞちに耶蘇を野にゆかしむ十三こゝに四十日
のあをりサタンにこゝろみられ獸とともにをりまた天の
つかひたちこれにつかへぬ○十四ヨハネのとらへられしのち
耶蘇がリラヤにくだりて神の國の福音をとなへていひけるハ十五
期ハみたり神の國ハちかづけり心をあらためて
福音を信ぜよ○十六耶蘇がリラヤのみづうみのほとりをあゆ
めるときシモンとその兄弟アンデレのみづうみに網うて
るをみる。こゝにてハ漁者なり十七耶蘇こゝにいひけるハ
きたれ我なんぢらを人をとるものとせん十八
こゝにてたゞちにその網をすてこれにしたがへり十九こゝ
よりすこしまゝみゆきゼベダイの子ヤコブとそのきやうだ

いヨハネの舟よりてあみつくろふを見て
三十たゞちよこの
きたりをよびたまひしゝそのそのゝ父ゼベダイ
と傭人とをもふ
ねるのこゝてこうまよりあさぐるを○三十一ペテロムまい
たる耶蘇をるたちち安息日よ會堂よりてをしへとるせし
ま三十二人々そのをしへに驚きあり其は學者のごとく
るをも權威をもてるものゝごとくをしへたゝまり三十三
その會堂よりけがれたる鬼よりつくたる人ありて三十四さ
けびいひけるハあゝナザレの耶蘇よ我らとあんぢとあん
の與ねゝんや。あんぢきたりてほろぼすつもるか
ぢハ誰なるかとしるをもてるかん
三十五耶蘇

こゝをを責ていひけるハ聲をいたしてこゝをいで
よ三十六汚れたるあくまよその人をひきつけさせ大聲をさけびてこの
をいでたり三十七衆をおどろき相とふていひけるハこゝ
何ごとぞやこゝ新しき教ぞや。けがれたる鬼
さへけんゐをもて命ずけ出ばをのれり三十八こゝをおいて
耶蘇のきこえあまねくカリラヤの四方ひろまりぬ○三十九こ
をやがて會堂をいでゝヤコブおよびヨハネとともに
シモンアンデレの家よりしに四十シモンのをかゝめ熱
をやみてふしわけをるあるを人たちまちこゝを耶蘇まつゞ
三耶蘇もきてその手をとりうをとおこしけるに熱たちま

ちさりぬ）うくてその婦うのもとに供事たり　三ゆふべ日の
ゆるとき人々をぞくその病とそつへるものの鬼につきたた
るものを耶蘇にたづさへきたる　三その邑こぞりて門にあ
つまり　三五耶蘇さまざまのやまひとそつへるおほくの人
人をいやしまたおほくの鬼をおひいだす鬼のものいふこ
とをゆるさざりきそは鬼うををしりたるによりてなり○
三六夜あけまへ耶蘇そやくあき人るきところにゆきそと
まて祈禱せり　三七シモンおよびうをとそにあるものと
もその跡をまつひゆき　三八うをにあひていひけるい泉に
あんぢをたづぬ　三九耶蘇うのもとにいひけるいまこゝを

紙のぶるたあはあんぢらとともに近郷のむらゝにゆくん。
まをしらもつたあはきまれぬるあり　四〇耶蘇あまねくカリラヤの
ゆまと經めぐりその會堂にをしへ福のぐうの鬼をおひ
いだせり○四一癩病のもの一人うをにきたりて曲跪ねがひ
いひけるいあんぢもし聖旨にのあふにきまをきよめ
あしうべし　四二耶蘇おそれて手をのべうをにつけていひ
けるいあるこゝろあるなり潔あまれ　四三いふやいなたちまち癩病
あまをそのの人きよまをり　四四耶蘇きびしくこをを戒つゝし
みてあまをとる人につくるあらうをたゝゆきておのの身を祭
司にみせそのきよめらをしたるあまモーセの命ぜしところ

のものを獻てうまつる證據をあせといひてさしあたり
四五 さまたげまうまつりて先このことを大いひつくの
たりひろめけまば耶蘇このちあるまる城にりぐく
たび人あきとろに居たりしひとりく四方よりのまき
こりり

第二章 數日のち耶蘇カペナウムにまきりしに二のき
の室にることきまうまたちにおほくの人々つど
ひきり門にたりべき場處さへもなきほどありき耶蘇う
まつとく教宣三こに癩瘋とやまるものと四人に
うせ耶蘇にきまるものありしに四群集によりてちら

づきうさりけまばふまのとるところの屋蓋をとりのぞ
きてちゆうふの人とねどとのまくつるおろせり五六耶蘇そ
の信仰とみてちゆうふのひとにいひけるハ子よあんちの
罪ゆるまるまうと六數人のこゝにやらに坐りしが心
のうちにおよひけるハこの人ハあに冒瀆をい
ふの神にあらまるたまの罪をゆるまることをえんハ耶蘇
たちにうまるが心のうちにこのごときことを論まる
をみづからそのこころにまりてこうまるにいひけるハあん
ちあんそ心のうちにこうるこるをろんまるやん九癩瘋の
人にあんちのつまいゆるまるとりいまと起てあんちの

ねどをとりてゆけといひたまへばやがてきやつそのひと人の子地にてつゝをゆるすの權威あるをあんぢらに知らせんとて遂にちゆうぶの人に十三年あんぢに告おきて臥床をとりあんぢの家にゆくのひけばその人たちまちおきてねどこをとり衆人のまへにいづひとりぐみゐおそろしき神をあがめていひけるはまことにいまごろのごときことを見しことなし○十三耶蘇ぶらうにゆきしに人々ゐるゐまにきたりけるを教ふるとき稅吏のやくしにまさるものゝ稅吏のやくしにまさるものゝ稅吏のやくしにまさるものゝ

きくりいひけるハヨハネのでしハパリサイのでしハ斷食を
るよあんちの門徒ハなぜよゆゑだんじきせざるの十九耶蘇の
まくるいひけるハ新郎の友そのもるむことまもるう
ちは斷食まるらをうべきうまくきうまくしまもるう
ちハだんじきまることをえず二十將來うまくもるむことと
らるる日きたらんその日ハだんじきまくべきあり三十あ
らたき布をふるき衣にぬひつくるものあらたをしなければ
そのあらたはおきあくるものの舊をほころばしてそのやぶ
きうへつてあしくなるべし三十まくの新酒をふるきうたふく
ろにいるものあらたをしきうけハそ

の囊とともにさき酒ものきハでこうそぶくろをきたるべ
しぶくしき酒ハあくるしきうたふくろにいるべきもの
あり三十さて耶蘇あんそくの日にむきのむくけをとらるー
にその門徒あるものつて麥の穗をつまもしめけるとき二十パリ
サイの人うきにいひけるハこのまくの安息日にまもるべきことを
をまもるハなぜ二十五耶蘇こたへりるハダビデおよび從
にあるものの乏くして飢しときあしたることをいまだ
讀ざるの二十六まもるもの祭司のをさアビアタルのとき神殿にい
りてたて祭司のほうハらんまもるべき供物のパンをくらひ
うつたるにあるものあるものあるくとりまたこうまるい

ひけるハ安息日ハ人のうゑまもるけられるものよりして
人ハあんそくにうちのたゑに設られるものにあらしむされ
ば人の子ハあんそくにちゝる主たるなり

第三章 耶蘇まゝ會堂にいまして手なくたる人ありけ
るが ニ ひとゝぐ耶蘇をうらたへんとそこうゑにこの人をお
んそくにちよいやゝや否とうゝぐ〳〵 三 いゑを手なくた
る人にいひけるハ中にたゝ〳〵ひとゝぐにいひけるハ
安息日にハ善をするもし惡をするもし生をたもくるもし殺とい
づゑをのあるべきかのゝ黙然たり 五 耶蘇いかりをもてふく〳〵
てみなもしこゝろがたくるの頑硬なるをうゑひ手なくと
る人にあんらの手をのべよといひけるゝ手をのべしに手
おせしにまたもとの他のてのごとくいゑり 六 パリサイの人
いでいりまして耶蘇をころさんとたゝらにヘロデの
黨にあひたりぬ 七 耶蘇そのでしゝもに海邊にゐり
ぞきしにおほくの人々ガリラヤよりこゑにゐたりまた
ユダヤ エルサレム イドマヤ ヨルダンのあなたまたツロとシドン
のほとりよりおほくのひとゝぐ耶蘇のなしたることをきて
こゝにきたりにむらがりきたる 九 耶蘇ひとゝぐの群集によりてお
ものやまくるゝことをおそれたゝあんたにあるに小舟をそなへそなへ
けとその門徒にいへり 十 こゝに耶蘇あまたのひとゝぐを愈せ

ーヨりてまべて疾あるひとゝ手まねきてさらんと
て擁擠しゆゑあり十まゝ汚たる鬼こゝ出てそのまへ
ヨひ出ふしさけびて。あんぢハ神の子ありとのひーを十
耶蘇こゝ出ゝヨ我をあゝなきことおゝきときびーいまし
めたり○十三耶蘇やまヨのほりてその意ヨこゝあふゝろの
ものを名しゝびきゝりて彼ヨつけを十四こゝヨおいて十二
くんでたてくおの出ゝもヨおきぎまゝ教をのぶるためヨつ
このえーしこゝ病どいやー鬼とおひいぶをの權威をきづく
まゝおもシモンをペテロとあづけきビベダイの子ヤコブと
その兄弟ヨハネこのふゝりをボアネルゲとあづくこゝを譯

ゝ雷の子あり十八まゝアンデレーピリポバルトロマイマタイ
トーマアルパヨの子ヤコブダダイカナンのシモン十九まゝ
イスカリオテのユダこゝい耶蘇をわゝせーものあり○二十こ
出ゝの家ヨいりーヨおほくの人々まゝきゝりあつま
りしゝば食をるいとまもなおりき二その親屬きくてこゝを
ハ狂氣ぜりといひてこゝを捕へんこゝてきゝる三まさ
エルサレムよりこゝ出る學者たちもこゝ出ベルゼブルヨとり
つゝきゝりこゝ鬼のこゝらヨりて鬼をおひいぶをあり
といこゝり三耶蘇こゝ出ゝをよびいましめてひけるハサタンを
いこゝでサタンをおひいぶえんや二十三國おのゝ出ヨもこゝ

てわうをあらそそぐそのくにたちべうらを三五まくるいへおのをのくにたちべうらを三六
サタンおのをるをとりおこしてまうをあるそそぐかれらをうるをこうへつて終あるべし三七たをるまでも勇士のいくまいを
まてそのだうぐをうばくんくせい先つよきものをあらそう
さきをばうばふこあくそそぐ縛てのちその家をうばうべし
六まをまくまくまくまくあんちちまつげん人のそべての罪とけが
をくくくるの熟漬ハゆるさるべけをと聖靈をけがすものハ
永ゆるさるべうばこうぎりあき刑罰まあがうーん三八うく
いへるハひとくく耶蘇をあくきまとりつうをくくうといひしが

ゆるあり○三その兄弟と母ときくくりて戸外にたち人をつ
うそして耶蘇をよぶしむ三九おほくのひとく耶蘇とめぐり
て坐したりしぶこうをまいひけるハ視よあんちの母と兄弟
そくまありてあんちをたずねぬ三耶蘇こくくていひけるハ
わがが母わがきやうだいハ
たをそや三一こくてまくりまを坐せ
る人々をくまをしていひけるハわがの母わがの兄弟をみよ三二
そを神の旨まをくふものいくをわがの兄弟わがの姉妹わが
母あを

第四章 耶蘇まをうくくまて教訓をもじめまをおほくの人
人うをまをあつまりけをばこれ舟にのりて坐しをくてのひ

ふひとい海にそゝぐてきしにたゝへたゝへをもてお
ほくのうゝをこゝにまくふ教ていひけるい三きけよ種
まくものまうんとて出ぬまはけるゝきある種いみちのほと
ゝるおちしがそゝの鳥きりてこゝをくらへる五あるた
ねい土うゝき磽地におちしがつちふゝらねばたゞちに
もえいでたゝどゝ日いでしりやり是根あきらゆゝるこの
まゝりとわゝたねい棘中におちしがいたらそゞちてこゝを
を敬げ是ば實をむすゝをざりきはまゝあるたねい沃壤にお
ちしがその苗もえいでゝもひとり實をむすゝるゝある
ひい三十倍あるひい六十倍あるひい百倍あり九まゝこゝを

らにいひるい耳ありてきゝゆるものはきゝべしと○十聚
人のをゝざりしゝき耶穌のこゝにまゝにありしものゝ十二
の門徒とこのたゝへをとひしりば十一耶穌この是ゝにいひけ
るい神のくゝるの奥義をあんちゝにはあるこゝをたまへど
他のものゝにいゝべてたゝへをもつてを十二こを是こゝにゝゝみる
ゝき視てもゝぞきゝゝき聽てもさゝゝばその罪のゆるし
をえざゝんためあり十三まゝこの是ゝにいひけるはあんちゝ
この譬をしゝざるこのさゝばいこのにしてそゞべてのたゝへを
識こゝをえんや十四そを是播者はゝをまゝへをまゝあり十五道のま
こゝを是のほゝりるおちしものい人こゝをきゝしゝき

たゞちに サタン きたりてその心に まの道をうしなはしむる
をひらるゝなり 十六 まこと 磽地に まう道をうるものは人こゝろを
きくときたゞちに よろこびてこれを受 さきにくもおの道
に根 あきらかゆゑたゞ 去 しのゝ後 ちのたゝに患難 ある
ひは迫害に あふるゝときはたちまちつまづくものなり 十七 まこと
いたゞきのあうに まう道たるものは人こゝろをきけども 十九
この世の思慮と 貨財 のまどひまこさまぐの情欲 いりきた
りて道をふさぐに よりつひに実をむすばざるものなり 二十
沃壌 に まう道たるものは人こゝろをきゝてこゝろとうけ 或
はさんぢふ 倍 あるひは六十倍 あるひは百 ものみをむす

ぶものなり ○ 二 まこと まう道をうるのひけるは燈をもきたりて
斗 のしたに あるひは牀 のしたに おくものあらんやかゝらんとす
燭臺 のうへに おくあらんためなるや 三 隱 てあきらかにあらざるは
なくつゝまれてあらはるゝものはなし 三 耳 ありてきくべき
ものはきくべし 三 まこと ひけるは聽 ところを
つゝしめよあんぢらこれをはかるの量 をもてあんぢら
にもはからるべし きたるあんぢらはなほ加 らまん 三 そ
なたるものはなほあたへらるべきものをもとらるゝなり ○ 三 まこと
ひけるは神 の國 は人 たねを 地
に たるごとし 三 日 夜 おきふしするうちに 種 もえいで

そぐくもその然ゆゑをしらを二六そ地ちいのびうう實
をむすぶのようしてそびめまい苗つぎは穂いでほのおう
よ熟したる穀をむすぶ二七もでよみの穂がのるうきいとる
ようりてたぐちよ鎌をいを地さもらあり○二八まさいひける
い神の國いうよおぞくへあるのたくとてこを地をた
くん三一粒のうくしだねのこくこを地はまくくき
いようづの種ようちひさけを三播てをえいづを
いようづの野菜よういおほきくうつおほいあふ枝をいぐ
してそくの鳥そのうげよもむほくよるあるり○二九耶蘇の
を地くのきくうるくくろよを地さぐひておほくうる譬をも

てをくへをうを地くさうくうを地り三四たくへさあくざれいう地
らさうくうぞ耶蘇そのでくくくもさを地をくきうを地くさ
うとぐくくら地を解きくせり○三五さそのHのくを地うく耶
蘇う地くさむふの岸へわくを地くいひけ地ば門徒たちひ
くびとをうくうせ耶蘇の舟をくくしたそのまくら地とく
もよわくを地くまとほくのの小舟もくをゆけを三時をおを
うぜおくう浪うちくくて殆どふねくを三六耶蘇をくものう
たく枕していねくくしの門徒う地の邸をくをまくていひけ
るへ師よわを地くうぐおぼくを地くをもうへくくをたまもぐるう三九
耶蘇おきて風をいまくめまく海をちぐまくありてあぐやうく

ふねといひけるに風やうておほいさわぎ早くてこの
きくこといひけるいあるゆゑこうくおそるるやなんちらあん
ぞ信ふかきや四こうきちふはげしくおこりきたりこといひけるか
うせと海さんもあさくふこと誰あるぞや

第五章 こうきう海をわたりてガダラひとの地さつき二ふね
より耶蘇のおがきるこきき惡鬼さとりつかれたる人たちに
墓間よりいでこうきに遇三このひとはつねをきこう
とせりきもくく桎梏こくさりをもてつなげども鏈をうちき
こわりぐせとうちくこくこをもてこうきを繫ぐるものなくま
さたきもこうきを制しうるものなかりき五夜もひるもつね

に山とはらをおいてさけびまた石をもておのれの身をき
ずつけぬ六こうきたちまち耶蘇をみてそこにきたりこうきを拜
しとおほごゑさけびこけるいは至上神の子いきをわれ
あんぢとなんのこうきたちあんやわれ神によりて求われ
をくるしむることなかれこうきハこうきを耶蘇あくきる人よりいで
よといひしさよりてなり九耶蘇こうきにあんちの名いかに
とこたへこたへけるいはわれら多くゆゑなりわが名をレギヨン
といふ十きりこの土地よりわれらをおひいだすなかう
きと耶蘇にねがひたり十一ここおほくの豚のむれ山さえ
さをくひあくりしが十二きべての惡鬼こうきにねがひてきた

らをおくりて豕さいらせよといひけるど 十三 耶蘇たゞちに
うゑらるゆゑせり汚たるおんたその人ゆゑいでゝふたゝび入
しうばおほまそ二千匹ほどの群をけ〳〵うけるゝ山坡
より海におちてうみにおぼれぬ 十四 牧者どもにげゆきてこ
のことを邑まちむらにつげるゝに人々そのありしこと
をみんとて出いでゝ耶蘇に逢きりて惡鬼にとりつかれたる
ものの卽ちレギヨンをもちたる人の衣服をつけたるを
こゝにおきて坐しあるを見おそれあり 十五 このことを
見しものども惡鬼にとりつかれたるものゝ家の
こゝとをつたへるゝに 十六 やがて耶蘇にその境をいで

んことをねがひぬ 十七 耶蘇ふねにのらんとせしとき惡鬼に
とりつかれたりしものゝ耶蘇にともなはんことをねがひけれど
も 十八 耶蘇ゆるさずしてこの言ひけるはなんぢの家にゝ
親屬にゆきて主のなんぢに行ひたまひしことゝなんぢ
をあはれみたまひしことを告よ 十九 こゝを去きて耶蘇のおのれに
なしたまつる大なることをデカポリスにのべけるが衆人を
ゐおどろきあつる ○ 三 耶蘇ふねにのりてまた海のあなた
にわたりしに大勢のひとぐこゝに集まる耶蘇はうみに
ちかくをり 三 會堂のつかさヤイロとのお人きたり耶蘇
をみてそのあしもとにさふし 三 切にねがひいひけるはわが

いとけなき女子なるぞ立ちあがりぬ　二四　と言ひたまへば、直ちに
起きて手を引きたまへば、熱去りぬ　二五　人々驚きあやしむ
二六　耶蘇これを見て、人々に言ひたまふ
たゝひておしあへり　二七　こゝに十二年血漏を患ひたる
女ありこの婦人多くの醫者のために苦しめられ、その所有をも
盡くして益なかりしが、　二八　耶蘇のことを聞きて群
集のうしろより、その衣に触れり　二九　その時血の
流れ出でたりしが、直ちに癒ゆ　三〇　耶蘇、己の
内に力の出でたるを覺えて、群集に向ひて言ひたまふ
誰か我が衣に触れたるや　三一　弟子ども言ひけるは
師よ、群集の汝を圧し迫めたるを見たまふに、誰か
我に触れたるやと問ひたまふ　三二　耶蘇、これを
見んとて、その女の為たりしことを知りたまへり
三三　女恐れ慄きて、己が身に生じたるを知りて
来たりて、耶蘇の前に俯伏し、その事の真実を
ありのまゝに告げ奉りぬ　三四　耶蘇、女に言ひたまふ
娘よ、汝の信仰、汝を救へり、安堂にゆけ、汝の
疾病なかれ　三五　耶蘇、この事を言ひたまふ内に、
會堂

の長の家より人来りて、汝の娘既に死せり、師を煩はすべ
からずと言へり　三六　耶蘇、その言ひたる事を聞きて、
会堂の長に言ひたまふ、恐れなかれ、信仰のみを
持て　三七　耶蘇、ペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネ
のほかは、誰にも随ふことを許したまはず　三八　
会堂の長の家に来りたまへば、人々騒ぎ、泣き
叫ぶを見たまふ　三九　入りて、人々に言ひたまふ
なぜ騒ぎ泣くか、子は死にたるにあらず、眠りたる
なり　四〇　人々、嘲笑ひたり、耶蘇、人を皆外に
出だしたまひ、子の父母と、ともに居たる者とを
連れて、子の居たる所に入りたまへり　四一　手を
取りて言ひたまふ、タリタ、クミ、と言ひたまふ
訳すれば、少女よ、我汝に言ふ、起きよ　四二　
少女、直ちに起きて歩みぬ、時に十二歳なり
人々大いに驚きたり　四三　耶蘇、この事を人に
知らしめたまふ事、厳しく命じたまへり、
また、食を与へよと命じたまへり

のつとさの家よりひとぐきくりていひけるあんちの女
をそでうきたりあんぞ師とわづらをや耶蘇たまもこ
そのつけしことをきく會堂のつとさんいひけるハおそる
るあうをたぶ信せよ三七耶蘇ペテロとヤコブおよびそのき
やうだいヨハネのほかハ誰ともゆくことをゆるさず
なきき三八をそでうくるいだうの宰のいくまきりてひとぐの
忙亂いとくあききけふとる三九いりてうをこいひける
ハあんぞさうきうつ哭やむをあい死るあるをたぶいね
たるのこ四〇うれら耶蘇をあざわらふ耶蘇をそのひとぐ
をいだし女のちいもとそのそもあくるものどもをひき

つを女のふしたるところにいり四一むをあの手をとりてこ
をこいひけるハタリタクミ。こをを譯ばむをあよわをあん
ちこ命をおきよをいふ義あり四二たぶちこ女おきてあめめ
をこの目ハとし十二歳あり。この目とを甚おどろきぬ四三耶蘇この
こをと人をあらをるあつをとをきびしく戒をむをめこ食
物をあをよと命したり

第六章

耶蘇ふるさとををりてふるさとをいりしその門徒
もこつをこをあをびぬ二安息日をおよびけをば會堂ををて
しへをもとむ衆人ふををきてあやしみひけるハいか
をしてこの人こうくのごとをきをとあるこの誰うこの智慧

とさづけられたるこゝふしきなるわざをなしその手よりあふれ
この三　この巻ハ木匠なるあらぎやマリアの子ヤコブ　ヨセフ　ユダ　シモンの兄弟なりしてその姉妹もこゝにまさらずあるあらぎやつひに人々この巻につかづけ　四　耶蘇この巻にいひけるハ預言者ハそのふるさとその親戚その室家のほかにおいていたふとまうす巻ざるこゝなし　五　耶蘇このしこゝてわづらふものゝ手をつけてたゞ數人といやせしほかふしきなるわざとあをこゝあらをざりき　六　まこゝうまらの信ぜざるをあやしゝ卒なむらくをへめぐりてをしへ給ふ　七　○十二の弟子を召てこゝまらと二人づつつかをこゝうまらんとしてこゝ巻ひこゝうを權威をさづけハまこゝうまらに命じけるハひとつの杖のほかハ旅のよういをあにをもるつあゝ巻旅袋なりひものまこゝ金をもるもをたゞ履をもきふさつの衣をきるあゝ巻　まこゝうまらにいひけるハ何處にても人のいへにいりバそのところにとゝまりをさるまそハそこに居たまへてあんぢらと接ぎあんぢらにきこのざるものにハそこをさるとき證のためにのあしの塵をもこゝつぎ巻まこゝうまらあんぢらにつげん　審判の日にハソドムとゴモラハこの邑よりもあほやをこゝるべ　十　てしたちいでゝ人々にこゝあらたむべきこゝうを說ひろめ　十一　まこゝうおほ

くの惡鬼をおひいだす。さてほくの病るものをあぶるを
つけていやしぬ○十四耶蘇の名ひろうけ給ふべロデ王こゝを
きゝていひけるハバプテスマをほどこせしヨハネいきて
へるゆゑさふしぎあるわざをなす十五ある人いこゝ
をエリアありといひ或いはまたしへのよげんしやのごとき
預言者ありといふ十六ヘロデこゝをきゝていひけるハこゝ
わゞが斬しところのヨハネなりとゐふ十七
さきにヘロデその兄弟ピリポのつまヘロデヤのゝゑより
て人をつかはしヨハネをとらへて獄につなげそもそヘロデ
がこの婦をめぐりしを十八ヨハネいさめてあんちきやうだ

いの妻をいるハよろしからずといへるゆゑなりて十九
ヘロデヤうれとうらみてころさんとおもひしかどあたはざ
りき二十ヘロデハヨハネを義人うつ善ありひとゝなりてう是
をうやまひうゝを保護うるきゝておほくのこゝをおこ
なひうつ歡喜てこゝきくこゝをせり二十一このゝてヘロデその
誕生の日もろくの大臣せんにんの長およびガリラヤの尊貴
ひとゝゝふるまひとるせる機會の日いとりけるべ二十二ヘロデヤ
のむすめきたりて舞をなしへロデとその席につらるゝ
人々をたのしまむ王そのむすめをよびていハ何ほしも
わゞにねがへあんちのぞむものハ我あんちに

あるふべし　三　まことこの是よりおほきなるものは
わが領分の半にいたるとも
二四　女いでゝそのもとにあるとこれを求べきことをいひけるに母を
あたちバプテスマのヨハネが首といふ　二五　むちまちたゞちに
いそぎ王にきたり求てバプテスマのヨハネがくびを盤にの
せてもちきたりこれを女にあたへたまへといふ　二六　王もはなはだうれひ
けれどもそのちかひたる誓と同席のものゆゑとをもてこれを
こばむこゝろなきのみをもて王たゞちにヨハネの首をもちき
たれと命じて兵卒をつかはしければ。こゝをもてこれを獄におい
てこれをきり　二七　その首をほんのせもちきりて女にあ

たへぬ。母にあたへたり　二八　ヨハネの門徒
たちこのことをきゝてきたりその屍をとりて墓にをさむ
るなり○　二九　使徒たち耶蘇にあつまりておこなひたることゝ
ゝをこゝにつぐ　三〇　耶蘇いはくこの人たちいひ
けるはひとりとなりてあんちらくに寂莫と
ところにゆきてやすまん。こゝは往來のものおほくして食をる
ひまもなかりしゆゑなり　三一　うをつる人をさけ舟にてさびし
きところへゆけり　三二　そのゆくをそひとびとおほく耶蘇
をしりてむらくにより歩行してそこにゆきあつまる
ところにさきだちゆきて耶蘇にあつまる○　三三　耶蘇いで

ておほくの人をそこなはこの島ハ牧ものあき羊のごとくさも
のゐるよりてこの島を憫さまぐのことゝ成そしくもじめぬ
三三 時までよ晩ごろまありけるがそのでしこの島きくりい
ひけるハこゝいさびしきところまして時ももやおそし 三四
衆人のくらべきものあきゆゑさそのみぢう〳〵四周の
むらぎとゆきて餅をもとめんためこの島をぞらし
めたまく 三五 耶蘇いゝけるハあんぢこの島に食をあるく
よでしこの島にいひけるハわがゆきて銀二百のパンをの
ひこの島にあるてくもしむべきの 三六 耶蘇この島にさい
ひけるハ餅ハいくつあるゆきてそよこの島に觀てそのうを

をあり五のパンと二のうをありとゝふ 三七 耶蘇まぐべての
人をくさくまして青草のうへにまゐしめよく命ドけを
バ 四 あるひハ百人あるひハ五十人づゝ坐せり 四一 耶
蘇そのパンの餅とふたつの魚をとり天をあゝき謝して
パンをとり門徒にあたへてひとぐのまへにおのしむまた
ふたつのうをも人ごとにまけあたへぬ 四二 ひとぐるむらう
ひて飽そのパンとうをの餘屑をひろひしに十二のうをに
みちたり 四三 餅をくらひたるものおよそ五千人ありき○
四五 たゞちに耶蘇そのでしをあひて船にのりむかうのきし
あるベツサイダへまゐらしめ已ハひとぐをとゝのへしむ

四衆人とうくせーのちいのりのあるゆけを見日ム
まて舟いうみのあるのあり耶蘇いひとりきのうを見り四
風さのらふよりて門徒たちのふねとこぐるつを見する
をそて曉の四時ごろ耶蘇うみのうくをあゆきてりう見
らとまぎんとせーよ四門徒そのうをとあゆるとみて驚
化のものなりとおもひさけびたり五そいでーるこを見
をそおそれーゆ急あり耶蘇たちまちこのをりようり
ていひけるふ心やそのをわをあり おそれてこのを見五
つひとふねのぼりーうび風やそねこのをてこころのうち
よりどろきあやーめるらとそるはぐー六こをそのこころ

の愚頑よりてパンの奇跡をもさくさまーあり○五七そ
でよりてゲネサレといふ地よいてりてふるこうをせり
五舟よりいでーよやうてひとく耶蘇を知りて五八お
まねくそのあるりの地いたもせあき病るものとねぐとのま
をそにるひ耶蘇のいまそとこころくときいぐてこをよ
つけ六そおほるそ耶蘇のいてるところあるひい郷あるひ
い邑あるひい村その街市よやるものをおきてこのをよそ
の衣のをそよだよさをせたきくとねくをまるさも捫
ほどのものいうをいをこるり

第七章　パリサイの人とある學者たちエルサレムよりきりて

耶蘇のもとよりあつまり 二 うるしの門徒のうちまきよらうさ
る手をるをもあらはさるる手をもてパンを食するものあるを
とがめて こゝをとがめたり 三 そはパリサイのひと〻ユダヤの
人々はまづいましめの人のつたへをまもりてその手をき
よくあらはされば食せず 四 市よりうへをきよめてあらは
ざれば食せずこのほかの杯まん鍋および牀をあらふこと
をさまざまのつたへとうけまもり 五 こゝをおいてパリサイ
の人とこゝろやたち耶蘇をとひけるはなんぢがでしたる
に古人のつたへをまもらずしてあらはざる手をも
てパンをたべるか 六 耶蘇こたへていはけるは

イザヤはよく偽善者をあなどりてよく預言せり。そ
のかきるごとくこれなり。この民はくちびるをもてわれをとうやま
へどもその心はわれをとほざかる人のいましめを教とな
していたづらにわれを拜するなり 七 そはなんぢらは神
のいましめをすてて人のつたへをまもるなり。またなんぢら鍋さ
うづきをあらひあるはほかにかやうのごときことをなすこと
たくさんなり 八 またいはけるはなんぢらおのれの遺傳をまもらん
とてよくも神のいましめをすつ モーセはいはけるはなんぢ
らは父母をうやまへ。またもしあるひはちゝはゝをのろふものは
しなるべしと。 九 されどなんぢらはいはく人もし

あるひはちゝはゝむうひてあんぢとやーるあべきものハコ
ルバン即ちそるへものあるといはつゝくぎとまゝと
十二 あらして人のその父あるひハ母のためまたとまるを
らくとあんちゝゆるさぞ十三 あくあんぢらハそのとゝまる
ゝゝろの遺傳とゝもて神のことぢとむるしうをまこおはゆく
この類のこゝをおとあゝ○十四 耶蘇まことひとぐとよびてこの
わゝまいひけるハちんちゝゝるわゝあこゝをきゝてさと
也十五 そゝゝゝう人まいるものハひゝとけがまゝこあとゝす
されど人まいつるものハひゝくを汚るゝふきてゆる耳わ
るものハきゝべし○十六 耶蘇ひとぐとをゝるれて室まいりし

よそのでし譬のこゝろとそ
ひけまハ十八 うれゝまいひける
ハちんちゝもるほさゝゝさゝのおほよそ外より人まいる
ものゝ人とけがしおさゝさるこゝとをゝらさるハ十九 そハそ
のこゝろまいりて腹まいりて厠まるもゝらふと
こゝろのものきまとまる二十 まいひけるハ人まいつるも
のハこれ人とけがを二十一 人のこゝろまいつるものハ惡念
姦淫 苟合 兇殺 二十二 盜竊 貪婪 惡隱 詭譎 邪侈 嫉妒 謗讟 驕傲 狂妄
あり二十三 こゝゝらのわしきこゝゝハゝる内まいつて人とけが
そものあり○二十四 耶蘇こゝゝをさりてツいとシドンのさゝひ
まゆき家まりて人まちゝをさゝんこゝとをねがひしかど

ゐきえぐりし 二五 そは惡鬼よつゐきたるをきあき女とまて
るをんな耶蘇のこゝをきゝてきゝりその足もとまふした
るまゝりてあり 二六 この婦はサイロピニシヤまうまれしギリシヤ
のものありしが惡鬼とそのむすめをおひいだしたまた
んこゝを耶蘇にねがへを 二七 耶蘇こゐまてはいけるは先こゝと
もに飽しむべしこゝものパンをとりて犬にあたゆるはよろ
しからぬをんなこゝをこたへていひけるはしかり主よ犬もまた
も案のしたにありて兒曹のたゝをくらふなり 二九 耶蘇
をんなにいひけるはこのことをゆへをまりてゐくを惡鬼はふ
んちのむすめをありていでたり 三〇 婦そのいへにまゐりしまあ

くきそでにいでゝ女の牀にふしたるをみしに○ 三一 耶蘇ツロ
とシドンの地をさりてデカポリスのちをそぎガリラヤのうを
まゐりたれを 三二 ひとゝ聾のどもるものを耶蘇につゐきゝり
て手をつけたまをんしるとねがひけゐば 三三 耶蘇ひとゝと
をあゐきこゐをほゝくつゐきゆき指をその耳にさしいゐまを
唾してその舌にさをり 三四 こゐうつ天をあゆき嘆とその人にむか
ひて エツバタといへ。こゐをとをそけばひらけよとの義なり 三五 た
ゞちにそのみゝひらけ舌のもちゆるをとけたゝしくものい
つを 三六 耶蘇こゐをと人につゐをるなかれとこゐをとをいまし
ゐばいましむるほどまをくいひふらしぬ 三七 衆をみはゞ

くあくろきてひけるいこの人のあせてこころくく善あるひいんぼときて色させあるひハ啞者とものいもしめたる

第八章 そのころあつまれる人々をるはぢあほうしがるにの食物もあるさりけるべい耶蘇そのでしとよびていひけるい二 色このあくのひしらぐとあそれむ。そぞる三日を色てくるもこのさりけ世界をるもこころよものあしもし飢しまくそのいくこうくさバ途間まてあやまんそのうもを遠慮すりきこるるものあるべあり四そのでしうるるこるへけるハこの野まてひぐとまりバンを得このひとぐとあ

五 耶蘇うるるひけるハバンいくつあるや。七とこころふ六 耶蘇ひとくぐを命じて地をさせしわ七のパンとりて謝しこるを肇ひとぐのまくるおらしんうたるその門徒をあくけるべるるもち人々のまくをあけりまるこちひさき魚をわづらをるまりるこるを祝しそひとびとのまくをもけるいふハひとぐこるをこちひて飽そのくづとるこつの籃をひろつてこるを食るものあるをそ四千人ありぞるもち耶蘇こるをこうへしぬ○十 耶蘇たるちをそのでしこちも舟をのりてタルマヌタのこうるゆきしをバリザイの人いでこるをこちろこんがため天よりの

をたづさへざりしことをろんぜるやいまださとらざるこの
あんぢらのこころはなほふかきかな　八　目ありてみえざるか耳あ
りてきこえざるかまたおぼえざるか　九　我五千人にわけしとき
つのパンとりあつめたるときその餘屑をいくかごひろひ
しやこたへていはく十二かごなり　十　また四千人にわけしとき
つのパンを擘あつめしときそのくづを幾籃ひろひしやこたへ
ていはく七かごなり　十一　耶蘇ふたたびいひけるはあんぞさとらざるや
○十二　耶蘇ベツサイダにいたりけるとき人ひとりの瞽者をつれきた
りてこれに手をつけたまへんことをねがへり　十三　耶蘇めしひの手をとりてむらのそとにつれゆきこ
れにつばをはきその目につばきし

ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十四　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十五　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十六　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十七　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十八　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　十九　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十一　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十二　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十三　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十四　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅
をもとめていはんとしたまへるや　二十五　耶蘇ちからとなりてうたへるにいひけるはあんぞたぶひに餅

て手をうまつけらひりる何らゆるや言めしい目を
あげていひけるハうまこの人々のあるくをうるは樹のこ
とし三五つひに耶蘇まこうまやうてをこうまの目をつけその目
をあげらせけまつハきるもちろん愈てまくてのものあきらかに
こえうり三六耶蘇うまをそのいくようくせいひけるハこ
の村よりるるこうまこのむらびとまつぐるあうれ○
と耶蘇そのでしとまよりピリポのカイザリヤのむらくゆ
く途間にてそのでしとそいひけるハひとぐハうまこと
いひて誰とまるまり三七こけるハあるくハバプテスヤの
ヨハネあるひとハエリヤあるひとハ預言者のひとをあり

といへるまり三八耶蘇こうまこにいひけるハあんたらハこうまこと
ひて誰とまるまるべテいこうくけるハあんちんキリストあり
三九耶蘇こうまこといまいめてわがこうくとたまうまつぐるを
こうまこと命ずたり○三十まこ人の子のうるこびほくのくる
しきとうけ長老さいしのをき學者ともまそくれうこ
あられて三日のちよりこうまこうくとうまこにかし
そめたまくり四あきこうまこと示たまひしうべテロ
耶蘇をひきていさめんこうせしまこ耶蘇ふりうくをその門徒
をきてべテロをいまいめひけるハサタンよりがうしろ
へまりぞけあんちハ神のこうくとあるもをうくつて人のこ

らをおもふ○三四ひとびとその門徒をよびそうまつらよいひけるハこれはきてがちんとおもふものハ己をそその十字架をもひてまつとしたがへ三五そハ生命をまつたうぜんとまるものハこれをうしなひわらのたのまぶ福音のためよいのちをうしなふものハこれをうべけまつふ三六そもそも人ぜんせかいをうるともその生命をうしなへハるよの益あらんや三七あるいハ人ハなにをもてそのいのちよりかへんや三八姦淫なるこの世よりおいてもとわがこれをたつるものをハ人の子もまた聖使とともよ父の榮光をもてきたるときこれを恥べし

第九章 耶蘇まこうまつるよりひりるハまもまことよあんちらよつげんこよたつものうちよ神の國のけんゐをもてきたるとみるまでハ死ざるものあり○二さて六日のち耶蘇ペテロヤコブヨハネとこもなひ人をさけてたかき山よのぼりたまひしが三うのまへにてそのをそうこうたまふ三その衣こうやきもろきさらさらとなるはぶしくして雪のごとくに世上の布さらしもうくもろくハふしあらえざるべし四エリヤモーセとともようまつるあらもれて耶蘇とこうさつまとまり五ペテロこたへて耶蘇よりひけるたラビまつらこうよをるハ善まきまよらつの廬をつくらせまつ一ハ

主のためハモーセのためハエリヤのゝあるまゝ六こゝ
へその、ゝとゝろをあらざりしありこゝ迄おそれしまゝ
よる七こゝて雲うまゝをあほひ聲らもよりゝそゝいひけ
るハらハわゝ愛子ありらまゝきくべし八やゝて門徒みお
ちゝけまゝ耶蘇とゆの迄のほうハひとりをもみざりき○
九やまをくゝるゝきゝ耶蘇うまゝ命じて人の子のよゝ
ゝくるまでハあんぢゝの見しらゝを人まつぐるあゝまゝ
いゝまゝ門徒たちこのこゝもとまゝ。うつたゝひまゝ論ト
いひけるハまみうつるとゝいふハあまのこゝゝ十うまゝ耶
蘇まゝふていひけるハエリヤハ前まきゝるべしと學者の

いつるハあまゝそや十二耶蘇こゝ、ていひけるハ實まエリヤ
ハさきまきゝて萬事とあらたむ。まゝ人の子まついてハ
そのさまゝくのゝつるゝこと受うつうゝトめらまゝこゝとう
きあるさまたり十三されどまゝまあんぢらまつげんエリヤハ
まゝでまきゝりしまうまゝついてあるされたりしこゝ人
人こゝろのまゝまこれとあしらゝを○十四耶蘇でしたちの
もとまきゝり。おほくの人々のうまゝとめらりうこめるま
學者たちのうまゝと論トをりしとゝたり十五衆たゝちまう
まゝとゝておゝろきまゝまよりて禮をあぜり十六耶蘇うくし
やまらひけるハ門徒とあまゝこゝと論ぞるや十七ひくゝのう

ち一人(ある人)くるくるけるハ師よ惡鬼(あくき)もめいちゐぬ惡鬼(あくき)よりつの
きてるわが子をあんちよつきくるきり 六 あくきのくりつ
くるきハうれあげたふきれ沫(あわ)とふき齒(は)をかこてつゐきた
つるあり。こゑをあひいぶきてあんこらをまれあんちの門徒(でし)よ
こひーうどうきてあるきあるきりき 七 耶蘇(いそ)ゐきるよこるくて
いひけるハあく信(しん)あき世(よ)あるゐるいちまでゐきあんちる
くもよあるんや何時(いつ)まてゐきあんちるを志のをんや。ゐ
きをゐきをつききられ 八 ゐきるくその子をつききるりーよ
あくき耶蘇(いそ)をゐてたちまちゐきと拘攣(くるくる)ーむ。ゐきを地よたふ
きこうけまろびてあるをふきね 九 耶蘇(いそ)その父よりひけるハ

いちのゐるより一つくあるーや。父(ちち)いひけるハをゐるきゐき
よりあり 十 惡鬼(あくき)あをくこゐきを火のあらあるひハ水のあく
よあけいきてゐるさんをりあんちをーゐこゐをえびて
きくおれをたをけよ 十一 耶蘇(いそ)ゐきよいひけるハあん
おをーー信(しん)ぜるこくをえび信(しん)ぜるものよおいてぶーあく
をざることゐる。 十二 その子のちたちー聲をあげるをぶ
をふぶーていひけるハ主(しゅ)よきゐ信(しん)ぜ。ゐのあんるきをたを
けたをく 十三 耶蘇(いそ)ひくくのをちきあるをゐて惡鬼(あくき)をせ
やいひけるハ啞(あし)ーてゐんほるるあくきよ我(われ)あんちよめ
いぶ出(で)てふくびてきよいるあゐきを 十四 惡鬼(あくき)さけびてあた

いまこの世とひきつけ・めていそしーうバこの娘死たるまゝごと
くなりぬ人々こゝとまでとまでゝ死りとつゝ三耶蘇その手をと
りておこしけまゝ〇六い世を家ゝいりしはその
門徒ひそゝゝひけるハまゝこゝをあひいぶをこゝお
たゝまゝしゝハあゝゆゑぞ九耶蘇こゝまゝゝいけるハこの
たゝひい祈禱と斷食ゝあゝされバおひいぶをこゝあゝゝ
さるあり〇三こゝまゝゝとゝさりてガリラヤとまゝこのゝと
と耶蘇ひとのゝゝとこのまゝりき三そハそのゝーゝとゝ
いて人の子ハひとの手ゝまゝこゝまゝこゝさゝ殺さ
まゝてのち第三日ゝよみゝゝるべしといひたまふがあるお

まゝ三そのゝき門徒ーたちこのまゝあゝゝをまゝとゝさゝゝを問ゝゝ
とおゝまゝたり〇三ゝて耶蘇カペナウムゝいゝゝり室ゝをりて
門徒ゝとひけるハあんゝゝ途間ゝてあゝとたゝひゝ論ぜ
ーや三ーでー默然たゝこゝまゝ途間ゝてたゝひゝ論ド誰ゝおほ
いあゝんとのあゝゝをひありけまゝバあり三五い世を坐ーゝて
の十二とよびこゝまゝゝいひけるハゝ能たらんとおもふ
ものハまゝべての人の後とあゝまゝまゝべての人のつゝまゝ
びとゝるらん三六ゝまゝ孩提ととりてこゝまゝのゝゝたゝゝ
こゝまゝといゝべきこのまゝゝいひけるハ三七あほまゝをわゝが名のと
めゝこのゝくのごゝきゝとさゝるゝのひゝりとゝゝるまゝハ郎ち

まことをうるあり。まことを接ものは、まことをうるあり。我をつかせしものを接るは、○三ヨハネの
をうらなくていひける師よ。まことをうるがたぐるものの
のあんちの名によりて惡鬼をおひいだせると見しかまを
らはあくまたぐるゆえにまを禁たり。三九耶穌いひけるはそ
の人とそむるあくまをはわが名によりふしきをわざ
をあくまひて輕易まをそうるものはあくまを。四〇
らは敵たぐるものはまをつくものあり。四一あんちく
とキリストに屬ものくしわが名のために一杯のそぐまを
もるんらしこのまをるものはまを誠にあんちくにつげん

その人はむくいをとらしるまをぐるあり。四二まことをあんをようそのまを
を信ぐるちひさきものひとりをつまづかるものはそ
の首に磨をうけられて海にあげいれられんうそその人の
ためにるほよくるべし。四三もしあんちのうと手あんちをつ
まづかさばこれをきりすれ兩手ありて地獄にもちきえ
ざる火にゆくんよりは殘缺ものいのちにいるはあんちの
ためによきなり。四四うじこのまものは蟲つきを火き
ぬをもしあんちをつまづかさばこれ
をきりすれ兩足ありてちごく卽ちきえぐる火にあげいる
らんよりは跛にて永生にいるはあんちのためによきな

を 哭 のこしてよいるものゝうちにつきぞ火きえぬ 四 をしるん
ちの一眼あんちとつまづくのさんこうまとぬきのごせまやう
うんありて地獄の火よあげいまられんようハうゝあまて
神の國よいるハあんちのたゝめよりきあり 四 彼處よいるむ
のゝうゝつきを火きえを 四 そハちべての人ハ鹽とつくる
ごゝく火とまて ま ゝ を。きべての祭物ハちほとまて鹽つけ
ちる 五 ちほハよきもの。さまど鹽をしその味をう
しるちゝるよとまてこゝまよあちとつけんや。あんちゝ心の
うちよ鹽とたまて。まさたゝひよ睦やゝゝぐべー

第十六章 耶蘇こゝとさゝヨルダンのあるさとへて ユダヤのさ

うひのうちよきゝりしよあほゝくの人々まさうまよあつま
りけまべ恆のごゝくこうまゝよ教論とるーたまゝ ニ パリ
サイの人きゝりてうれとこゝろをひけるん人その妻と
いごきハよきゝ。こゝふていひけるハモーセハあんちゝ
よるにく命ぜーや。 三 うまゝいひけるハモーセハ離縁狀と
うきあゝてこゝを出こゝとゆるせり 五 耶蘇こゝてう
まゝよいひけるハモーセあんちゝのこゝろ剛硬よりて
このかきてとをーたゝるゝ。されど開闢のこゝめ神ひゝを
男女よつくゝりたまゝ。 七 このゆゑよ人ハその父母とこゝる
まその妻よあひてハふゝりのこゝの一體とるゝべーさまど

二まいあるべしとなんあり九このゆゑは神のそなへたまへるものゝ人これをもるべからざる○十室にありて門徒たちまちこのことをうひけるとき○十一耶蘇うまれにいひけるはおほよそその妻をいざしてほのかんをもとめるものはその妻に對してうんりんをおこすまこと婦も上二その夫といざしてほらに嫁ぐこのをんなも姦淫をおこなふなり○十二耶蘇にさからはんがため人々をあざけりけるとき門徒たちそのつきされるものといまめたり○十三耶蘇こゝをきゝていはくなんぢらにいひけるは孩提をわらはきたらせようれしと禁るなかれ神の國

にをるものはかくのごときものなり十四まことにまことなんぢらにつけんおよそをさなごのごとくに神の國をうけざるものはこゝにいることを得ざるなり十五をるもちこうまをとりいだきて手をそのうへにおきてのせこゝをを祝せり○十六耶蘇みちにいでけるに一人まをきたりてひざまづきとひけるは善師よをれうきりあきいのちを嗣ためにあるをるをべきこと○十七耶蘇こゝをいひけるはなんぞわをを善といふやひとりのほかに善ものはなしをるもちち神なり十九いましめはあんちごをるをなかれ姦淫をるなかれ殺なかれ盗なかれ邪安のあかしをたなるなかれ拐騙なかれ邪なんぢの父と母

をうやまへ　二　こゝをいひけるは　師よこゝをるわゞいと
けるきよりまれるものあり　三　耶蘇こゝをきゝていつくし
みいひけるはあんちるほひとらと虧ゆきそのもちもの
を賣まつしきものゝほどこるせさらば天にをいて財あらん
おうゝてきたり十字架をとりてゝまきたるさうへ　三　うきて
のこゝをきよりてうるしをうきひてさりぬこのきはおほい
なる産業をもてるゝものあれば　三　耶蘇みまつりてその
門徒にいひけるは財をもてるものゝ神の國にいるはいかの
ようにいるゝ　三　でしこのこゝをきゝておどろけり　耶蘇まこと
なくてこゝをきゝにいひけるは小子よたゝうと恃ものゝ神の

をたにはいるはいとやすこうるゝ　三五　富ものゝかみのくにに
いるゝはゝ駱駝の針のあるをとをるはあなやすし　三六　でし
たち甚おどろきたゝひにいひけるはさらば誰うをくひと
らくべきや　三七　耶蘇こうをきゝをそのひけるはこれ人にあは
たをざるゝこゝろあれど神にあらをいはこうを。神はあらを
ざるゝこゝろあけまべあり　三八　こゝにおいてペテロこうをきゝい
ひけるはまきゝ一切をすてゝあんちにまさうゝを　三九　耶蘇
こゝをいひけるはまこゝをるんちにまつげんまをと福
音のためにに家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あ
るひは母あるひは妻あるひは兒女あるひは田畠をすてる

ものハ二十この世にて百倍とうけざるものなし。郎ちいくきや
うだい姉妹たちこどもたちをそなへもようけま
さのちに世にいとぎりるきいのちをうけん。三されどおほ
くの先なるものハあとにあり後なるものハさきになるべ
し。○三さてうれしエルサレムハにのぼるときうら耶蘇でー
にさきだちゆきけるバこうきもちどろき且おそれてあとに
ひね。耶蘇をふにとともおひて將におのきにおよんとせ
るこころをこのきにつげたまひけるハ。三それらエルサレムに
のぼり人の子ハさいしのをさと學者たちにうけられん。この
きこうきと死罪にさだめ異邦人にわたし。三四まことにきを嘲
弄しむちうち唾しうちこころきをてろさん。こうして第三日によ
みがへるべし。○三五ゼベダイの子ヤコブとヨハネ耶蘇にきて
いひけるハ師よ願ハくハこのもとむるこころをなしたまへ
と。三六こたへたまへ。三七こたへていひけるハあんちにわが
あにとみぎとんこころをねがふや。三八こたへていひけるハあんち
榮をえんときにきこたへのひとりをその右にひとりをその左
にさせしめよ。三九耶蘇こたへていひけるハあんちらハ求と
ころをしらざるなり。あんちらハわが飲ところの杯をのみうく
るところのバプテスマをうけうるや。四〇こたへていひけるハ能
さぐし。耶蘇こたへていひけるハあんちらハ實にわがのむ

ところのさつきを飲まさわがうるぐとろのバプテスマをうくべし　四十　されどわがみぎひだりは坐せることゝはわが予ねきまあるべ唯そなくらられたるものあらんぐ　四十一　十人のでしこれをきゝてヤコブとヨハネとのきたほ色を　四二　耶蘇うまこゝとよびていひけるは異邦人の君たるものはまのはその民をさまめまく大なるものともはこのうまこのうつまは權をとるこれあんちらがるところあり　四三　さまとるあんちらのうちまはは然まくべうまぞ。あんちらのうち大なるらんとおもふものはあんちらまつかうまるものくあらん　四四　まこあんちらのうち首たらんとおもふものはまぐての人のこのあまぐとあらん　四五　そこの人の子のきたるも人をつかうふためまあらぞうして人まつかうまぞまこおほくのひとまこのたりその命とあたくて贖とあらんたるあり○　四六　うくてこのまこエリコまいたり耶蘇そのでしとおほくある群集のひとびとこもまエリコをいづるときテマイの子あるバルテマイくいふ督者みちのうまこまざして乞ある　四七　ナザレの耶蘇ありときてよぐこまをひけるはダビデの子い此まこまれとわれをたまく　四八　おほくのくれまぐまをまこいまめけまぐもいよくまくよぐこまてダビデの子よまことあまれたまくといひけまぐ　四九　耶蘇たちとまりてこの

まことをくべと命じけるに人々めしひとりびとうまるいひけ
るハ心とやすんぜよ起て耶蘇あんぢとよぶを盲者そのう
ちきとまをてたちて耶蘇ゆきてうまるき
いひけるハあんぢまをまるあたをせられんとねがふやめし
ひつひけるハ主よみえあんくをねがふ耶蘇うまるい
ひけるハ往あんぢの信仰あるんぢをすくつたらしうまる
みゆるてくと得いまをまをまをぐひて路とのけて

第十一章

うまをまを橄欖山のベツパゲとベタニヤよりくる エルサレム
ゆちかづけるとき耶蘇ふたりの門徒をつかはしてこ
ニ あなたをまをいひけるハあんぢ對面のむらゆけ。うまを

まをまをバやがて人のいまをるどのくぶるとろのつなげる驢
馬の子とまをくべし。そをとときてひきたまを三 もしたまをうま
をんぢをまをなるゆゑ主のもとのもるやといふものあらバ主の用
ありといへ。さらばたちまちそをとこをまをおくるべし 四 この
をまをゆきて門のそとの岐路につなげるろむの子をみてこ
れをとときけまを五 そこにたてる人々のうちあるものいまを
らまをいひけるハこの驢馬のことをときていまをるやを六 で
し耶蘇の命ぜしごとくいひしかバ遂にゆるしたりを門徒
ろたのことを耶蘇にひきくたりておのの衣をそのうへにおき
きけまを耶蘇こをまをこのまをりハひとりぐおほくハそのこころも

を路上に敷きあるひへ樹のえだをきりてみちよしき九この
つ前よゆき後よあさぎよひさけをひけるホサナ
よ主の名よりてきたるものい福るり十主のるよりて
きたるわれらの父なるダビデの國ハさいちひるり至上と
らろよホザナよ○十一耶蘇エルサレムよりて聖殿よいりて
こくくみまた時もそよ暮よおよびけるべ十二くも
よべタニヤよいでゆけり○十三明日うまらべタニヤよりいでし
とき耶蘇うゑたり十三まるのよ葉あるいちじくの樹をうて
その樹よまにのあるんとてきたりしよ葉のほかのまにもを
えざりき。これ無花果樹のくきあるざるべあり十四耶蘇こ

のきふむうひて今よりのちなんぢの果をとらんと人
あるざれといふ。門徒これをきけり○十五こうまらエルサレムよ
いたり耶蘇みやよいりてそのうちよをる買賣をるものを
みやよりおひいだし兌銀者のだい鴿をうるものこしつ
けをたふしこうの器具をもてみやをとおるこをゆるさ
ぎまるこうまらよをしへていひけるハわが殿ハだんこく
のひとの祈禱のいへとらるべしまるさるよ
あらぎやたつるよるんちハこまを盜賊の巣とるせり十八
がくしやと祭司のをきこまをきていのまして耶蘇と
ほろぼさんとたつりしがこのひとをおそれ衆をるそ

のをく　よおどろきたまべり○十九日　ゐまして耶蘇みやこ
をいでゆけり二十翌朝うまちいちじくの樹をちぐるときその
根よりこがれくるをみる　三ペテロおもひいでて耶
蘇にいひけるハラビみよ詛しそろのいちじくハうまご
ま三耶蘇こたへていはくてうまよいひけるハ神を信ぜよ三まこ
とまことなんぢらにいはんげん誰ありてもそのこころにうごか
ずしてこのいふところの言ハうまことあるべしと信
じていちじそのごとくのごとく成べし四このゆゑにまなんぢらにつげんおほよそ祈禱
のときそのねがふところのものハうまをうべしと信ぜ
ばうまを得べし二十五まなんぢらに立ていのりをするときこと
し人をうらむることあらばこれをゆるせ。そハ天にいまそ
なんぢらの父にまなんぢらもまたその過をゆるさんため
なり六こしまなんぢら免さずば天にいまそなんぢらのち
もまたなんぢらのあやまちをゆるさじ○七うまこ
まさエルサレムにいたりて耶蘇みやとあるいはるとき祭司のを
さ學者およびに長老どもきたりて八うまにいひけるハなに
の權威をもてこのことをなすや誰かこのことをなすをべき
ためになんぢにこのけんゐをあたへしや九耶蘇こたへて
このまことにいひけるハまたも一言なんぢらにとはんまたな

こゝよ。さらばまゐるんぢゝまるのに權威をもてこゝを
ゐるといふらをつぐべし　三ヨハネのバプテスマを天より
この人ゝまりのまれまこゝよ　三この事ゝたゞひまに論ドいひけ
るふをし天よりといまでさゝばるまゆゑこの事を信ぜざる
うといまん　三まゝ人ゝまりといまでゝ。この事ゝ民をおそれまこゝる
ゐりそふ民ゝるヨハネを預言者とせゝまよる　三つひまこ
たゝてあらまをといふ耶蘇ゝゝゝていひけるふまもる何の
けんゐをもてこゝ事をるまゝゝるんぢゝまこゝゝド

第十二章　耶蘇たゝゝどもてうまゝまうこゝ事ゝ。ある人ぶたう
むらけをつくり籬をめぐらし酒搾をほりまあらをたて農

夫まこゝしてほうのらゝゝゆきゝゝ。期ゝりけ事べ葡萄
むらけの果をうけゝゝんたゝめまに僕をのうふのもゝまつこの
ゝしける　三農夫どもゝ事をとゝゝうちたゞきてむ
くうゝゝしめたり　四また他の志もべをこの事まつのもせ
しまのうふどもゝ事を石ますてうち首まきをつけ恥らしめ
てうゝゝしむ　五また他のゝゝをつのもせしまゝ事をもも
ゝろぜりまゝほうまおほゝゝつのもせしまあるひは打ある
ひはころしぬ　六ゝまひまりの愛子ありけるがこのわが
子はうやまふまんといひて卒まその子をつのもせしまま
そのうふゝ互まいひけるいこは嗣子ありいでゝ事をころさ

んさらば産業いとれるのものあらんハ、まるさちらく
てらをらわし葡萄園のそらまをてらり九まうらばぶだ
うぢらけの主あるをあべきこの色きらりて農夫どもを
うちほろぼし葡萄ぢらけをほろぼすの人ハ、おらるべし十エ匠
のきそらる石いくへのきそのの首石とあるり十一色主のお
しなまへるこをよしてわぢらの目ハあやしとまるらくろ
ありとあるさ色しといあべしまざるこの壁ハ十二
おの色らをさしてうらりとあり耶蘇をそらんとせ
ゐどもハ喪をもおそれて耶蘇をさりゆけを○十三こ色ら耶蘇を
そのこらぢをよりて陷いれんとしてパリサイのひとら

ロデの黨のうちより數人をつらをせり十四つらをを色
ものらを耶蘇のもらよきらいひりるハ師よあんぢハ眞
あるものあるまこ誰をもうらさらざるこをを色らハ右
る。そハ貌よりて人をとらびまらをもて神のみち試を
ーふ色べあり人税をカイザルよりをもむるハよきや否を色ら
をらむべきら納ざるべきの十五耶蘇そのまこをあらざるを
ちりてうれらよいひけるハあんそを色こをろむるやで
ナリをもきりてを色よみせよ十六こ色らをもきりけ
色べ耶蘇こ色らよいひけるハこの像と號ハたを色。こをら
てカイザルありとをる十七耶蘇いひけるハカイザルのものハ

カイザルよりへーまく神のものハうみよりをべし。この事ら
これと奇とせり〇六復生るしといひるせるサドカイの人き
そりて耶蘇よりひけるいまだ師よりもよりエモーセがうきか
けるよハ人のきやうだいもし子るくして妻をのこし死バ
そのきやうだいこのつまをめとりて兄弟のあとをたらべ
しとこゝよりエ七人のきやうだいありしが長子いまをめと
り子なくして死ぬ三第二のものこれを娶まと子なくして
死ぬ三たい三もまたこれを七人ともこれをめとりたれど子
なくつひよりこの婦もまたねり三復生のときこれらよりの
つまこのをんるハたれの妻とあるべきこの。そハ七人ある

しくこゝ事をめとりたるもの多あり三耶蘇こゝてこの事ら
ひけるハなんぢらハ聖書をも神のちからをもあらざるよ
りてあやまるなるぞや三それ死よりよみがへりきも
ハめとらず嫁ぐもの天よあるつかひたちのごとし三そに
ものよみがへるこゝよりエつまそいモーセの書をの篇よ
神うまよりてそれハアブラハムの神イザクの神ヤコブ
の神ありといひたまひしをざるの三神ハ死
にしものの神よあらを生ものの神ありなんぢおほいよあ
やまれり〇六學者のひとりこのうまらの議論をきいて耶蘇のよ
くこゝをこゝこゝーと。きこりこれよひけるハをべて

のいましめのうちいみじき首なるや 元 耶蘇この道こそけ
ちはまべての誡のこうらはイスラエルよきけ主なるまこと
の神はまるもち一の主なり 三 あんぢ心をつくし精神をつ
くし意をつくし力をつくし主なるあんぢの神をあいまべ
しこの道おきての首なり 三 だい二もまこの如くなるあり おの
ぢのごとくあんぢのとなりを愛まべしこの道より大なるお
きてあし 三 ごうしや耶蘇よいひけるい善なる師よあんぢ
神はまるもち一よりてほかなしまことみなるといひたまこと
あり 三 まこころをつくし智慧をつくし精神をつくしち
からを盡てこの道をあいしまこのおのぢのごとく隣をあいま

るはまべての燔祭と禮物よりもまさるなり 三 耶蘇この道が
道理をあまるこころをつくしてこうれいひけるはあんぢ神の
國よりとほからぬこのうち敢ていまよりふものあり
き○ 元 耶蘇みやよありて教誨をるせるときこれをこと
へくいひけるはあんぞ學者いキリストをダビデの子といふ
や そもそもダビデ聖靈よりてみづからいふ主は主よ
いひけるいわをあんぢの敵をあんぢの足のもとにおくま
でわが手のみぎよ坐せよとダビデこれをこの如
と主とまこたり。さればいかのでその子あんやおなくの
人々よろこびて耶蘇をきくこと多せり○ 元 耶蘇を

なるせるときこうまるまいひけるいあがき衣服をきてある
き市上まて人のあいさつ會堂のうさ筵席のうさをこ
のこ四まさ嫠婦のいへと呑いたりてあがきいのまをま
るがくしやを謹防よこのまるのつみせまることもめつこも
重し○四耶蘇さいせんのもうでむうひて坐しひとりの錢
をもてるいるとこまるひしまおほくこめるものおほ
くるけいまたり五ひとりの貧やもめきたりてレプタふた
つとるけいまねこは四厘ほどまあるれり六耶蘇そのでし
をよびてうまるまいひけるい誠まるまるんらまつけん
はこまるけいましまくての人々よりもこのまづしき嫠婦

は おほくあけいまたり四三そこ
ろをもていまこのをんるいそのの不足ところよりそのをく
てのもちものもるもち全糧をこくいまたれんあり
第十三章 いまを聖殿よりいでけるとひとりの門徒うまるい
ひけるは師よみまくこの石この殿宇いうまさんあ
ぞや二耶蘇こたていひけるはあんぢこの大るいく
をくるる一のいしも石のうへまるづさまるしてはのこる
三いまを橄欖山まてみやまむうひ坐したまひしまペテロ
ヤコブヨハネアンデレー等ひそうまとひけるは四いつをの
時このことあるやまるさもべてこのことのあらんときい

うある兆あらやまを見るよつげたまく　五　耶蘇こゝをてうれらよいひけるい人よあざむうを見ざるやうつゝしめよ　六　そいおほくの人わゝの名をもつてきたりまをいキリストるりといひておほくのひとを欺惑べし　七　あんちゝ戰といくさの風聲をきくゝきおそるゝなかれこれのことゝまるあるべきなり　八　そのゝ世ども末期いまだいたらず　民ハおこりてたがひせめ國はくにを攻またところゝ地震あり饑饉みだれをおりこをらい苦難のはじめなり　九　あんちゝ　みづからつゝしめよそはあんちゝ集議所よわたさをまた會堂よてむちうたをうゝ證とあるんためわゝのことゝるまりて　侯

およびゝ王のまへよひきたるべし　十　そのゝして福音はまづ萬民よいひろめざるをえず　十一　人あんちゝとひきたるさば以前まりあるをといをんとなかれまたおもひそらよあるのをたゞあんちゝそのゝきゝ賜ところのことをいひべし。そはまものいふまものはあんちゝよあらゝば聖靈なり　十二　きやうだいは兄弟を死よわたし父は子をわたしまた子はそのちちゝよさからひてゝをを死しめ　十三　またあんちゝはわゝの名よりてまべての人よにくまるべしされどをもりまでをのぶまものはまゝちるゝこゝを得ん　十四　よげんしやダニエルのいひしゝろの殘暴にくむべきものゝ立べうざるゝこ

ろよたつとゝバ（讀もめよくおもふべし）そのときユダヤよ
をるものハ山よのゞきよ　十五　屋上よをるものハいそぐよ
るなゝうまゝ。まゝ物をとらんとてその家よいるなゝうまゝ　十六　田よ
をるものハその衣服をとらんとてうへるなゝうまゝ　十七　その日
よハちゝめるものと乳とのまゝをる婦ハわざはひなるうゝ
十八　あんぢゝ冬にゞるこゝをまゝぬゝうまゝ　十九　なぬよいのれまゝそ
の日よあやをあらんゝうくのごゝき患難ハ神のものとつく
まゝたゞめたまひし開闢よりいまよいまゝるまゝであらざりき
まゝ後よまゝあゝト　二十　をし主　二十一　その日をまくあくまたまゝそ
バ一人だにまくまゝるゝものあらじ。さゝまゝど主のえゝらびたまゝく

るゝゝゝのえゝまゝまゝものハたゞよその日と減少したま
ふべし　二十二　そのゝきもしキリストこゝよありこゝよありと
るんぢゝよいふものあるゝも信ぜるなゝうまゝ　二十三　そハ偽キリスト
にせ預言者おこゝをてゝるしゝくふしぎあるわざをおこなひ
揀選たるものゝもあざむくこゝをえバあざむくべけまバ
あり　二十四　あんぢゝ愼よわまあゝうゞめあんぢゝまこゝくぐく
こゝまゝと告　二十五　そのゝきこのあやゝのゝち日ハくゝく月ハひ
うのゝまゝをうしるひ　二十六　天の星ハおちゝ天のいきほひ震動べし　二十七
そのゝきひゝぐゝハ人の子のあらハへある權威と榮光とまゝて
雲のうちよあゝたまゝきゝうゝと　二十八　まゝそのゝゝき人の子

そのつゝひたちをつゝをして地のくそより天のきてまで
四方よりそのえゝまれしめのとあつむべし　二六　それあんぢ
ら無花果樹よりてたゝくをまなべ。その枝もぢやらう
のゝをして葉めぐめば夏のちかきとしる。二七　うゝのごとくあ
んぢらもまなべてこれらのことをみる時ちかく門ぢちよい
たるとおもへ　二八　まことよあんぢらつげんこれらのこ
とことごとく成るまでハこの民いうせざるべし　二九　天地いうせ
んされどわがことばハ廢ず　三〇　その日そのときをしるものハ
いたづらわが父のみあり天よあるつゝのひも子もたるもあるま
ものなし　三一　○　この日いつまでのゝきくるゝとあゝぎれば

あんぢらつゝあゝて醒いのをせよ　三二　そもそも人の子ハたゞひ
ぢちせんとしてその權を忘れんべぢもよ委おのゝくよあるべ
き事をさづけまして閽者よおてたゝぞまれと命じて家と
さるひとのごとし　三三　このゆゑよあんぢらもおてたゝぞし
てまもるそハ家のあるじあるひハ夕あるひハ夜半あるひ
ハ鷄ゐくらあるひハ早晨ようつるとたゝさまばあり
三四　おそらくハおもむざるの時きたりてあんぢらがねむる
るとをん　三五　まもおこゝとぞしてまもるあんぢらこつぐ
るハたゞあたちもべての人よつぐるあり

第十四章　さて逾越まるたちたわいぬねパンの節の二日まへ

祭司のをさとぐるーやだち詭計をもて耶蘇をとらへこ
ろさんとしーいひけるハまつりの日まハあるべからざるお
そるゝくハ民のうちに亂おこらんの　三　耶蘇ベタニヤの癩病
シモンのいへにて食しあるときまくるときあるをんな蠟石の
うつわものをもあらひたるきナルドのあぶらをもりてもき
たりその盒をやぶり耶蘇のかうべにあぶらをそゝぎたり
四　ある人ども互にいひけるハこの膏
をつひやすハなぜゆゑぞや　五　こをとらバ三百ぱりの
デナリをえてまづしきものにほどこすべきことをえんとこの
婦をいひとがむ　六　耶蘇いひけるハこのものをうるさるな
んぞこのをんなをとがるやまたやうやくて善事をおこなふる
ものとまづしきものハつねにあんどゝとともにあるべし
んぢゝ意にまかせてこの事をなすことを得べしーまた
ハつねにあるんぢゝとともにあらずハこのをんなるハ力をつ
くしてなせりそハあらかじめ我と葬たるわが身にあぶ
らとそゝぎたり　九　われまことにあんだゝにつげん天の
下いづくにてもこの福音のひろめらるゝところにてハこの
をんなのなせしこともまたその記念のためにいひつゝ
らるべし　十　さて十二のひとりなるイスカリオテのユダ耶蘇
をとらへさんとて祭司のをさとゆきしーに　十一　のをさこをき

きてよろこび銀子をあたへんと約せしがユダハ耶蘇を
うらさんと機をうかゞひ○除酵餅のいとひのはじめ
の日にあたりたちまちぎこーの羔をころすべき日なり耶蘇はい
ひけるハまぎこーの食といふべからずしてきたるべき
きら日耶蘇ふたりの門徒をつかはしてこゝにいた
ひけるハみやこへゆけさらバ水をいれたる瓶をもてる人
にあふべしこゝにて汝らゆくその入るところの家のあ
るじに師いはく我はぎこーを食すべき客房ハ
いづこにあるやといへ且さきがこれ陳設たるおほいな
るにかいさーきとるんぢらこゝにてわれらのためにそ

こゝに預備よ夫でーゐきて京城にいたりて耶蘇のいひたま
つるごとく遇へりぎこーのそなへをなせり○日く
れて耶蘇おのゝの門徒とともにきたれり席につ
らなりたるとき耶蘇いひけるハまことに汝ら
ちかつけんまことにこゝに食するなんぢらのうち一人まと
をうらべし五うれひておのゝ耶蘇にいひいでけ
るハまさかのこゝにあらのまさかのひとりにあらず
この耶蘇こたへていひけるハ十二のうちのひとりまと
どもに手と盂につくるものこれあり三人の子ハおのゝ
ついて錄したるごとく逝んさまと人の子をうるまの

はてきたひあるうる。そのあいうまとごりしうび幸ありし
あくん　二　のれうたよくきうるとき耶蘇パンをとりて祝して
是を擘うまうまあうくてのひけうん取てくくこまんて
ゐ身るり　三　まこと杯をとりて謝しこうまうまあくけまび皆
このさのつきりのめりて　言　耶蘇いひけうふられい新約の
わゐ血ましておほくの人のためよるくつきくろのものを
ま　三　て是まこととまあんちくうまつげん今よりのちあくし
きものと神の國までのまんにまでぶ葡萄ゐてつくまるも
のとのまーい　三六　うまうまう歌をくうひて橄欖小ゆけて　三七　耶
蘇うまうまいひけうい今夜あんちくうるままついてつ

まづうん。そはまま牧者をくうんそのとき綿羊ちくべしと
ちるされたまびあり　三八　されどまよみづくりてのちあん
ちくまさきぶちガリラヤゆくべし　元　ペテロ耶蘇にいひけ
るはたくひうる礙くもまはたこうぞ　三九　耶蘇こまいひ
けるはまは是まこまあんちまつげん今日このよ鶏ふて
びあくまくまあんち三次まをたくいちん　三〇　この是生
たくうくいひけるはまんちくもまちるよ
もあんちくちまぞといたと門徒くるくいくり　三一　のくて
うまうゲツセマネといふくろいくり耶蘇そのでしまい
ひけるは祈禱あひどくてまさせよ　三二　つひまペテロヤコブ

ヨハネをころしたるひゆき甚しくうれひこのゆゑをもとめ
三四 うれひよいひけるハわが心いたくうれひて死るばかりなり
ふりるんちらうてとまりて 儆醒 をる 三五 耶蘇 まことにしるしてゆきて地にふしいのりていひけるハもしかなハばこの時をさりしめたまへ 三六 まさいひけるハアパ父よあんちにまかいくハをべてのくしあるぶこの杯をとる事をゆるしたまへされどもわがおもふこころをなさんとするにあらず
あんちにおもふこころにまかせたまへ 三七 耶蘇 きたりてのもらのいねしるを見ペテロにいひけるハシモンあんちいねたるこの一時もめをさましをることあたハざるこの 三八 誘惑に
いるぬかうめをさまし且いのれそのたましひハねがふなれど肉體ハよわきなり 三九 またゆきておなじことをいひて
いのれり 四〇 返てまたこうもらのいねたるをみる ハ目のもくぎりき 四一 三次きたりてこのもらにいひけるハ今ハいねやもめ充分なり時いたれり人の子ハつみびとの手にわたされる 四二 起よわれらゆくべしをとわるものちかづけり ○ 四三 こくいへるときたちまちに十二のひとりなるユダつるぎと棒とをもちたるおほくの人びとともにきたりぬ 四四 耶蘇 をきらひ學者および長老のもとよりきたる

のこゝろを號をふるしていひけるハわゝが接吻をするものハそ
ゝをゝりこゝをとゝゝて居るとゝゝひきつゝを四 居るものもきゝ
まして耶蘇をちこのよりラビラビといひてゝちつけせり 四 ひ
ゝびと手と耶蘇をこうけてゝちふ 四 こゝゝまたるものゝ
の一人つるぎとぬきて祭司の長のゝもゝをうちその耳を
きゝり 四八 耶蘇こゝゝてこのゝゝいひけるハ刃と棒とをも
ちぬをびとをこゝゝるごとくしてゝをとゝゝをきゝる
このゝを日々あんちゝゝも殿をてゝゝるんぢゝ
ゝをとゝゝざりきされどこハ聖書をこうるもせんがため
あり 四九 門徒をる耶蘇をゝるをてにげさりぬ 五 あるわゝき

ものその身をたゞ麻の夜具をまとひて耶蘇をゝをゝのひさ
ゝしゝ逮捕のものゝこれをとゝゝけゝば 五一 こゝをあさの
やゝをもてゝのゝてのゝの色をさゝをり○ 五三 ひとゝゝ耶蘇をさ
いしの長をつゝをゝきけるを祭司のをさ長老およびゝゝ
やだちこゝゝくゝこの色のゝをあつまれり 五四 ペテロこゝほゝ
をるゝをて耶蘇をゝをゝのひ祭司のをさめ庭のうちまでゝり
僕とこゝをゝさして火をあゝまりをゝり 五五 さいしのをさ
およびゝ議官をる耶蘇をこゝろさんとして證とゝもむをゝも
えず 五六 おほくのひとゝゝ耶蘇をいゝをゝりのあゝしといひい
だせゝゝその證あゝず 五七 あるゝ人々たちそゝをゝりのあゝ

しといひいでけるは　五九　これ手をもんづくりたるこの聖殿をこぼち三日のうちに手をもてつくらざる別のみやとたてんといひしをきかはきけり　六〇　こゝにいひしのその證まこあるべきなりき　六一　祭司のをさ中にたちて耶蘇にこゝいひけるいかんぢこたへるこたへなきこの人々のなんぢたつる證據いかに　六二　い迦を默然としてゐるこたへなきけるは祭司の長まこうまにこゝひていひけるはなんぢは頌べきものゝ子きりすとるなるか　六三　耶蘇いひけるはそなた人のこ大權の右にさゝ天の雲のうちにあるをきたるをなんぢらみるべし　六四　こゝにおいて祭司のをさその衣をさきて

いひけるはこれまこなんぞまこほかのに證據をもとめんや　六五　その褻瀆たるこゝはなんぢらきけるところなりなんぢらいかにおもふやこれまこそつて耶蘇を死にあたるべきものとさだめたり　六六　あるものはこれを唾しまこその面をおほひ拳をもてたたきいひけるは預言せよまこまこんぐどもも手のひらをもてこれをたたきたり　六七　ペテロ下庭にをりしにさいしのをきのある婢きたりて　六八　その火にあたまりをるをみて孰々この人をもていひけるはなんぢもナザレの耶蘇とともにありし　六九　ペテロうけおもはしていひけるなんぢこれをしらずまこなんぢのいふところのことをさとりえざ

るなり。うくて庭門まいでけるに、そのきねその婢
うるとをてうるもらるまたるるものまこいひりるかこの
人もの黨のひとりあり七ペテロまとうけおさみおちら
くしてうるもらるまたるものまとペテロまいひけるかあ
んちまとまこのとまもぐらのの一人ありぞふるんちいがりラヤ
の人ありその口音こるまるあくるヒこるまかいてペテロ誓
てるる神のたがをうふるるもあんちらかいふそのの人を
るるハあらるるありといひしこのとこの鷄ぶるるびあ
きに見バペテロ耶蘇のはるるりふるるびるくまくまる三次
るるとあるまるといるんといひたまひしことをおもひいど

第十五章 平且まおうびたちちまる祭司のるる長老ぐくトやだ
ちまくての議官とともまるるりて耶蘇をおるりひきづる
てピラトまるるせり。ピラトこのるるまるひけるかあんちハ
ユダヤひとの王ある。耶蘇こるくけるいあんちのいくる
るくくこ三さいしの長おほくのこるをもてうるるをうつちふ
四ピラトまる耶蘇まふていくるひけるかあにもこるくさる
うこうるるこのあんちまるついて證をたてこていのるうそ
や五ピラトのあやしとまるまるまるまるそまる耶蘇あにをもらるくさ
りき六さてこのまるちまるまるうるるうる求まるせてひるり

の囚人をあるその例あり七ときはバラバといふるものあり
かのものとともに謀叛せしとものどもうちおるがくつるものを
さりしがうまつりはそのむほんのとき人どころせしものと
もありへひとりく聲をあげてよもつ恒例のごとくせんこ
とをねがへり九ピラトこのものらをへていひけるはユダヤ
びとの王をあんちらまわらゆるさんこのものどもをむや十こ
ものピラトさいしの長たちのねがひよりて耶蘇をとり
たりとあらびあり十一祭司のをき民どもはバラバをゆるさ
んこをねがへしむ十二ピラトまたこたへていはくユダヤ人のこうとあんちらおのるものを

ものはいかとわがあるんこをあんちらのそむや十三これ
らまたさけびてこをしを十字架につけよといふ十四ピラトこの
ものはいかるはこのものあんの惡事をなせしやこのものを
またさけびてこをしをおふどろに釘よといふ十五ピラト民の
よろこびとこらんとしてバラバをこのものはゆるし耶蘇と
むちうちてこをしを十字架につけんとなりけりせり兵卒
どもこのものを公廳につれあきの組中をよびあつめこのものにむ
らさきの袍をきせいばらのこんむりをあたうむりしめ
たりこうていひけるはユダヤびとの王やこのものを十六また
葦をもてその首をうちきうつ唾をひきまづきて拜しぬ十七

てうろうしをもりそ紫のこうろもとそきまとの衣をきせて
ぎふじのようけんをてひきゆきしの三アレキサンデルとルフス
の父るクレネのシモンといへるものいあらすきたりて
そのこころをとらはりうつまけまつ強てこまる耶蘇の十字
架をおそせたり三耶蘇をゴルゴダとりハ即ちされうべと
いつるところろようまきたり三没藥と酒をまぜへてのませ
んとをりしこまをうけさりき四耶蘇をあふしうまつ
けしのち誰あるをくんと鬮をとりてその衣服をまうて
五あさの第九時まいをもを十字架まつけ六その罪標を
ユダヤびとの王とのきふりの盜こうまもよ一人

ハそのの右ひとりハその左まをあふしうまつけるこまを聖
書よ。このまハ罪人とともまこうぞへられたりといひしまうる
七ゆきゝのまの耶蘇とのしを首をふりていひける
ハあゝ聖殿をとはちてこうまを三日またつるものよ九みつ
うををくひて十字架をおりよ三祭司のをく學者をまも
おれをく嘲弄してたがひにいひけるハ人をくひてみつ
うををくひあをを三イスラエルの王キリストハ今あふぞ。
このようをぞるべ。をくべまををうををうをと信ぜん。まをを
もをあふしうまつけらををるものをくまこうまをとのしを
一三第十二時より第三時まつをあまねく地のうへく

らくありぬ 三四 第三時 よい西をおほくとるまちにエリエリ
ラマサバクタニとのふ。こゝをと譯ばわが神わが神あんぞそをを
きゝたまふやといくるあり 三五 うさもらしたちこるものゝ
うちある人こゝをきゝてこれはエリヤをよぶありといふ
三六 ひとりまもきて海絨をとり醋をふくませこゝを葦
につけてこゝをのまんいひけるは俟エリヤきたりてこ
をとをそこふやあとこゝろみんとの 三七 耶蘇おほいなる聲をい
ざーそいき絶 三八 みやの幔うくすりあさまもさけて二とる
なり 三九 耶蘇 ようひてたちこる百人の長こゝをみたまを氣
たゝをーとゝをいひけるは まことにこの人は神の子なり ○

四〇 まこゝをみるものゝなかにゆくる婦ありしそのうちにまりヤ
ものハ マグダラのマリアおよびちひさきヤコブとヨセの母
なるマリア まこゝサロメなり 四一 ゝをまこゝハ耶蘇のガリラヤよお
こゝをまひしこゝをまこゝをまこゝをつかうくしものゝをまこゝをありすこ
この時のまもこゝをまこゝをまこゝをまエルサレムまのぼりしおほくの
をんなゝゆこりき ○ 四二 この日ハそのあくあんそくまちの日
のまくの日なりしゆゑ 四三 日くるゝゝき尊貴きのぎやくあ
るアリマタヤのヨセフといくるものきこゝをりこの人は神の
國をのぞめるものなりこれをこゝをもてこゝをもてこゝをもてこゝをもてこゝをもて
蘇のきこゝをねと求たり 四四 ピラトまもきて耶蘇のきこゝをねとこゝをもてこゝをもてこゝをもてこゝをもて

やしき百人のこしをよびてこの者ハ死ですり時をへてる
やいるやをこひ四五ひやくまんの長すりきてこまをもり
屍をヨセフまあるふ四六ヨセフ泉布をこひまもらしてこ
耶蘇をとりおろしこまをそのぬのまてつみ磐まほりた
る墓まあき石をもるのまんまもまろむあけを四七マグダラの
マリアおよびヨセの母なるマリアその屍をおきしところ
をもるり

第十六章 安息日まぎてマグダラのマリアとヤコブの母なるマリア
およびサロメ香料をこひもくヘ耶蘇まねらんもきてこ
れりニ七日のもづめの日いもてもやくヘ日のいづるころこの者

ら墓まきもり三たづひまいひけるい誰うまをもるのためま
石をもるの門よりまろをしもるものあるまんこれをの石
もるはずおほいなまばるり四このくてこれる目をおぐれば
石のもでこまろびあるを五墓まいるましまま白ころもを
きるわるきもの右のうるまざせるをもておどろきあ
やしめを六少者こまるまひけるおどろきあやしむる
こまをんちらい十字架をつけらましナザレの耶蘇をた
づね。この者ハよみがへりてこまをしたこのをきしとこ
ろをもるを七且ゆきてその門徒とペテロまつげよ。この者ハな
んぢらまさきだちてガリラヤまゆけを。なんぢらこまとまて

うをと見べし。そのちそのあんぢよいひごとく八
こうをいでて墓よりたちまち。こうの戰慄うおどろきまさ
言をも人をうざりき。こをおそれしゆゑあり○九
い迫を七日のちのめの日よりあけごろよみがへてまず
マグダラのマリアまあらわる。さきに耶蘇より七の惡鬼
をおひいだせり十耶蘇とともにありしもの哭こうふしめ
るときこの婦きたりてかれらのことを告十一こうをう耶蘇
の活てこのをんるを見たまひしことをきくしかれ信ぜざ
りき十二こののちかれらのうち二人のものいなかへゆきけ
るとき路をゆくとき耶蘇うたりたる貌をこうをうあらた

る十三このふたりのものゆきてほかの門徒たちにつげを
どもまたこれをも信ぜざりき○十四まさそのち十一ので
しの食しをるときにあらはれこうをうこれ信るきとそのこ
ころの剛硬とをいましめたまへり。こうをう耶蘇のよみ
がへりたまへるのち其をみしものの言ことを信ぜざ
るがゆゑあり十五耶蘇こうをういひけるはあまねく世界を
めぐりてまべての人にふくいんとのべよ十六信ておバプテ
スマをうけるものはすくはれ信ぜざるものは罪にさだめ
らるるなり十七またるるものにはこのごとき奇跡ありさがふ
べし。わが名によりて惡鬼をおひいだしことばをかたるなどの方

言をいひまどはせくくこゝへ毒をのむとも害あるべからず手をやまひのものにつけるべきなるかたちに愈ん○十九このくて主ハの恵らをうけたりしのち天にあげたり神のみぎにぬ門徒たちあまねく福音とのべつゝ主もまたこの恵をうけたりとあらせその後にげふこゝろの奇跡をもて道のあかしたまへアーメン

新約聖書馬可傳終

95-91193

2045
NOV 24 1942